

宝物殿

宝物殿は、出雲大社が所蔵する貴重な品々を展示する施設です。

1 階では、大社の起源、60 年にわたる造営の周期、特徴的な祭礼など、大社の歴史に関する展示をおこなっています。展示空間の中央には、2000 年の発掘調査で発見された 13 世紀中頃の本殿の心御柱です。また、本殿の檜皮葺きの屋根がどのように重ねられているのか、原寸大で再現した屋根の断面図を見ることができます。

2 階には、弥生時代（紀元前 800 年～西暦 300 年）の曲がった玉（勾玉）と青銅製の戈（銅戈）など、大社にまつわる貴重な遺物が展示されています。どちらも 17 世紀、東に 200 歩離れた命主社の境内から出土しました。勾玉は新潟県産の翡翠でつくられ、銅戈は九州北部で生産されました。神への供え物と思われ、出雲大社が古代からいかに重要であったかを物語っています。また、もうひとつの珍しいものは、19 世紀につくられた「八雲琴」と呼ばれる 2 本の弦を張った弦楽器（琴）です。一般的な琴は 13 本の弦を張っていますが、この楽器の制作者は、夢の中で大国主神からデザインを教えてもらったと話しています。また、本殿内の天井に描かれている、渦巻く色とりどりの雲のレプリカも展示されており、普通ならば目にする事の出来ない本殿の内部を感じることができます。

1981 年に建てられた宝物殿は、1960 年代のメタボリズム建築運動の中心人物である菊竹清訓氏（1928-2011）の設計によるものです。